

## 亡者の出会い

大雲取越の舟見峠と色川辻の間には、細い杉の並木に挟まれた石畳の谷道の区間があります。この場所は「亡者の出会い」と呼ばれています。伝説（および近年の旅人による目撃談）によると、この道を歩いていると、向かい側からやってくる亡くなった友人や肉親に出会うことがあります。

### 死者の国「黄泉」

熊野は古くから死後の世界と関連付けられています。熊野は都に近かったものの、山の多い地形のため、近寄る人が少なく神秘的な場所でした。『日本書紀』という8世紀の年代記では、熊野はイザナミノミコトという神が葬られた地であり、また、その夫であるイザナギノミコトが彼女を追って亡者が住まう黄泉の国へ向かった地です。

古来、日本において山は畏敬の対象であり、山頂はこの世とあの世の境目が曖昧になる場所とみなされてきました。仏教が伝来に伴って多くの山に寺院や墓地がつくられると、この見方はさらに強まりました。この考え方は熊野、中でも妙法山阿弥陀寺で特に影響力を持っていました。伝えられるところによると、日本で亡くなる人は一人残らず、あの世に向かう前にこの寺を訪れます。

### 危険な道中

中世において、熊野古道を通ることは危険を伴いました。近代的な施設や医学が登場する以前は山道を歩くのは非常に困難で、参詣中に怪我をしたり命を失ったりすることもありました。参詣道の脇には、不幸にして道中亡くなった参詣者を偲ぶ数多くの碑や仏像がひっそりと置かれています。

また、餓鬼やダルという妖怪の伝承も残されています。ダルは険しい道で旅人に憑りついて生命力を吸い尽くして殺し、その人もダルにしてしまうのです。一口食べ物を口にすることでダルを追い払い安全な場所にたどり着く力が得られるとして、参詣者は常に少量の余分な食糧を持ち歩くよう戒められていました。

### 亡者と出会う

「亡者の出会い」で死者と遭遇した話にはあるパターンが見られます。舟見峠を越えて、無事なだらかな道（この場所のこと）まで下ってきた巡礼者は、気楽な気分になりはじめます。風が変わり、あるいは霧が立ちこめ、道のはるか向こうから誰かがこちらに歩いてくるのが見えます。その人影が近づいてくると、それは亡くなった友人や親族であることがわかります。しかし、巡礼者が挨拶したり話しかけたりしようとすると、その人は姿を消してしまいます。

いくつかの話では、巡礼者はこの場所で会ったのは生きている人だと考えます。しかし、家に帰った時、ここで会った人は当時すでに亡くなっていたことを知ります。実は、巡礼者が出会ったのは、あの世に行く前に鐘を撞くため阿弥陀寺に向かっていたその人の魂だったのです。